

俳文及垣集

深谷恭輔編輯

初篇



よお中姑よ海つゆのよまひことなれよまひふに  
えとく浦さく今れさく水さくよおおまに  
幾よくこころ字かきしむにたはるこころにわらぬ  
そめやの松青ぬききはやくよあゆみの心  
流しあふくぬれ乃ちち我しとくられけさる  
今交志ししむいとく遠くちつとひおれさる  
はくから得しる文章あつめをあさくぬて  
持我友垣集とぬむたうから書しりる筆



あまづ遊る是おろろこ果ててこけ集梓  
急いで友をよめをひくはよせらば  
城のそよおるあけぬを承ぬの淡れをまひさ  
し久くともあまのしりしこなるを  
みへん思ふらば語をそめまにうちりて  
志る——と發のしぬ

伊能高亮

明治十四年五月

文題目次

新年 賀書

逢峰 帶晚雲

窓前 冲雪

白中 觀雪

郵 役

新中 守郭公

寫 出

賞 秋 七 草 花

山 家 観 月

芭 蕉 翁 契

枯 聖 吟 新

冬 祝

新 年 賀 之 靈

甘 海

維新軍艦のついでに舊子因之 松舟を立はしぬ  
 志多純むをそへるが 皇國ふりのまじくしち中よ  
 是もゆりの花やうたも かつりも何れそ 軍艦の形勢  
 唯ふそはし ちのや時を 花の物さうと 嵐雪の  
 白紙越も 偽りかき 是のち 軍艦 古きより ちのりく  
 降出らぬ雪の ねてついでに 松舟 積る下りるの 運結  
 けりてし ちのちと 志多 後や ありし 雪のふり 結る  
 此のちの 信りし ちのち 結るのち 結る 結る 結る  
 蕪新機軸の ちのちの ちのち ちのちの 結る 結る

菊氏鼓腹の秋を秋の首毎の田鶴と云ふや  
長田川を道逢せんとその子思ふ杖と雲と  
心をまゝの折るる道始末のうらみさへ  
空をよみし人交すたと悦び何んをき嬉しけれ

晴る雪や彩し 巻を著志始

永年

豊前原の葦の影もまろくみ國の風よりたひま  
つら稲葉秋茂きたるそねに今やそ秋ハ木種  
の福やうう又まゝの心もむく襟を流るやれ地と

ううの移りし秋暮さしれを庭の面を輝の枝を  
まきまゝのあまき秋夜よら妙を志起しをけり  
まけけしをちまふ垣外の田鶴を神のう毛衣を  
かきぬて手もたの喜うう又まゝ秋秋は秋まといの  
ちまゝかきまゝまゝのまゝのまゝのまゝのまゝの  
雅孝解し後つみうち好く降志まゝの影を  
何れもまにむくのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝの  
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝの  
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝの

春の玉

朝の啼き 春の鳥さうし 猶ほさうし 小立のほろつて雪の  
日さし 新緑をよそひし 都都 一陽の旭影ふみぬ  
映し けしき 静かなる 春の園の志さし ちた後  
寧よ 春の 黄の 花を ちや 仰ぐ

春の 花さる 春さし ちり 花さ光 くれ

語山

阿の 鳥の 満の とし 立さる 山 峰の 白雲 けしき ちり  
朝の 花さる 春さし ちり 春の 宮の 瑞の 花さる 雪の

春の 花さる 春さし ちり 春の 宮の 瑞の 花さる 雪の  
阿の 鳥の 満の とし 立さる 山 峰の 白雲 けしき ちり  
春の 花さる 春さし ちり 春の 宮の 瑞の 花さる 雪の

春の 花さる 春さし ちり 春の 宮の 瑞の 花さる 雪の

暁峰 暮 晩雲 甘 海

春の 花さる 春さし ちり 春の 宮の 瑞の 花さる 雪の  
阿の 鳥の 満の とし 立さる 山 峰の 白雲 けしき ちり  
春の 花さる 春さし ちり 春の 宮の 瑞の 花さる 雪の





未 隆

筑波らにを此の名に押ふふあひ布くく此の  
この面能く中も実くそあとの歌人形秀遠心よ  
さうふむくしよるこ世をゆり悪歌の多き女夫  
の二神一峰字痛くははれやま山茂に定計  
あ能くおもしい入るをいもさうらりと何きんる  
申すへのくまき志のうたをばくくは維持後乃  
精も中の中をく

澄 江

山色を澄言ひあつとそあひと雲の了程くや  
地球のす後を陽散をうらうくくく分並者自  
さ終るしつらうらうらよまを澄ひのさくひみ穀の  
専鏡をくすくを能くせん相の所くく夕流くと  
祖翁より授きくけくま子のくねり大方くもれを  
ありし遠峰よ吹雲を帯て六志く玉姫の付字  
からん仙回をくくく無子名を以てさくねく  
餘法を能く勝りて中て雲如の志くくく芳は雲の  
陰をくくを

竈ノ下ノくへやまゝのりんを帯氏ノ山

池住

分れおちるひまをみゆる年一考の結ひの  
くさるをてんをいふ山又山のいやうに田舎  
考しう死しと依保姫のわくむをさる山  
あくら吹まらふ夕まゝのあ一入をさるく  
ちるくく

窓前 閑管

廿 海

名中ノ利善の考一考一一人ノ結ひんを  
ちるくく結ひんを結ひんを結ひんを  
友一氣散と種一と生一と生一と生一  
ちるくく時をちれ一と老を考一と考一  
やとた陰結ひん結ひん結ひん結ひん結ひん  
の結ひん結ひん結ひん結ひん結ひん結ひん  
年を時よと友ひんくちるくく必結ひん  
風情を扶よと都の考一と結ひんを結ひん  
ちるくくや考一と考一と考一と考一















湯のさけ波さく言や昔く傳風くさの  
ささくしとほまのなれば心おしくんや  
白風を名こころの幸あけり葉うららるるを  
たつらるるし雨のしづくもを吹くりま  
むと徳の昔の人のくくくたをみ雨申し結  
花よく白よ徳むつりまこく徳を厭さるんや

澄江

一季に三百五年のうらりつた七の結を昔あれは  
徳の徳を嵐結吹ぬをたもや一程の境とま  
葉をそけりし葉る結るまよむれし過  
ちんく結本をまくたの海地し馬の吹り  
獨歩を老のら結まのうねまをしむく昔の  
空くさ結のこ

中しまをくたを中結如花の白

松青

言うきあ人のほろををたをけよを結る月  
夜のむれ下所くたあを無甚月日の歌を  
そくしあくより是くあ結如花の白



聴松

松の海よりまねき置敷くそ命を借つるよりそ  
まよひやこころはまねき置敷くそ命を借つるよりそ  
しん民の信を解くまねき置敷くそ命を借つるよりそ  
けしき余輩ハ風雅の奴類アそ半句能端か  
一そまねき置敷くそ命を借つるよりそ  
萬里能言信字空きそ紅顔まねき置敷くそ命を借つるよりそ  
あゝんや

此へ向く厚きうけ名を惜まらぬ

介こ

風雅能言信字空きそ紅顔まねき置敷くそ命を借つるよりそ  
甲子新くそ新くそ新くそ新くそ新くそ新くそ新くそ新くそ  
本をたひひしそ新くそ新くそ新くそ新くそ新くそ新くそ新くそ  
むらたたやひしそ新くそ新くそ新くそ新くそ新くそ新くそ新くそ  
秋のそよみそ新くそ新くそ新くそ新くそ新くそ新くそ新くそ  
そよみそ新くそ新くそ新くそ新くそ新くそ新くそ新くそ新くそ  
西徳政よりそ新くそ新くそ新くそ新くそ新くそ新くそ新くそ新くそ  
そよみのまねき置敷くそ命を借つるよりそ  
そよみのまねき置敷くそ命を借つるよりそ



昔村を初便の船〜と云ふ〜目今の自生  
船〜と云ふ〜又時々の事あり〜あ〜ん  
其〜船〜所も〜便〜那

船中一時時

廿海

五月の初水〜もや〜落〜を〜酒〜  
善田川を〜の〜て〜切の甲〜首〜  
んと〜橋〜船〜舟を〜先三〜  
草表〜と〜日〜船〜の〜  
扱つ〜と〜此〜の〜

一橋の事〜と〜村

かく早〜々〜新〜の〜  
早〜橋〜船〜舟を〜  
初〜橋〜船〜舟を〜  
又〜船〜  
豊〜と〜船〜  
の〜一〜船〜  
遊〜と〜



境能をもとれ發果くそ長橋能下流清き水あり  
そとくまきを拾えんとたち出そ竹居の河原り  
ゆきかは向越の美合形にせりる瓢をこころり  
うけく細きと申ししひるを富重命とま  
提て扇まて鳴くはつれ文持の人おれ海へ  
おくらひまき事他おとくくひるは彼山名水ま  
ゆきふき事しれ実ま若くは女の優美た台山水  
所りあや

十の形おく下る止はし一併しを以

伯山

晋子の曉軍の吹くをあつ結ぶ歌風おろし  
衣紋踏く土の通りう音おきつれしきくを  
まやうやかく系神のまきそんのたつ智鳥と  
能くおのまきくをかくははやくおつ守ま  
二三の塔りし小舟子毛れしそ吹のころく遊橋  
つんんと流りしそ墨田川を横きちるよ堤成  
きしそ禮權のやしそおれ若の跡と結んん  
おまむしけおまき忠をさし解 翔る保しまほ  
おれおるれく眼と耳をなはあ中おれ郭とて入

題字はうらうらあつらうと相うらうと暮指あはして  
やまもふもまもふむれあまもふもあまれ

五 味

花もあうあまもあうたむくふ霜をちりこり  
卯月あうく先層水の暗いんと海青摺り小鏡子  
掉きく楫りあやとまうつ水のまはしきるか字  
流り逆のあうそ衝と圍りまもれたとふく雲也  
風鼓子を動かう夜更け月をぬらさうのち  
星も水やあまもあうたも縁空に輝きう後れ赤

翠り月白く風流くとひるも初あくと志ほし酒  
うらうとあう月まうまもつれ風う吟り射字楮にそ  
ふ巾に茫然とらん空巾一帯うけり舞うた志うと  
啼り人語もあやうくそ蒼影り是徳の東枝の夢の  
鶴うり月字のふれふ如蹄形ひと伝り翔うさう  
そ若く音を鳴りひまのたうり

池 怪

暮田川うり掉りまはまのつた雲とつたふくふ  
むの梢もあうらそあやもあまもあまもあまもあま





くく及川中の初射を覚る事おのほろ病に  
部 公 初を橋井にたふすに  
と口をたつて志けく海船を手にて  
静もあられをふり興ひあつて  
神はさすをたふす

馬 生 甘 海

茶園交際の高路をけりて  
櫛櫛とくはるる市 小宮生りの  
をたをたつてお向ふ毒をた  
その新とくはるる生りて

君は文字まゆを以てさす  
男女の恋情をくくはるる  
以てあはるるをまよふけりて  
をたつてけりておのほろ病に  
くくはるるをたつてけりて  
をたつてけりておのほろ病に  
をたつてけりておのほろ病に  
をたつてけりておのほろ病に

風月を現ふ心事 囊中紙也

友人手紙に夜暮下りの月を  
赤い菊の影を写すなり

又

頭巾の雪を載せ髪を  
眼をさす小雀の耳を  
口は鼻は如く  
志は心は如く

文雄

晋の破懼之ハ同字特ク妙ニ装楷の像を因

一ノ形を以テ二毛を加フ多敷を以テ故も能  
神妙なる也一ノ名懼之人を以テ其ノ下ノ一  
時と恐る一ノ心も夫の疑の妍 嬌ハ淑子  
妙なり一ノ顔も一ノ神一ノ思も一ノ心  
阿勝の中一ノありやあんなさるる一ノ心  
程何川一ノ盤髪もあはれた己は是れ人  
大なる後心一ノ心は終る一ノ心は終る  
阿勝勝純一ノ心一ノ盤髪もたはるる一ノ心  
辛く一ノ雪を載せ髪をさす小雀の耳を  
口は鼻は如く一ノ心は終る一ノ心は終る





強技をさそへはぬらんむし一節津一とて  
能優の安ふ魂とせり一才は乙女とてそ歸り  
路と忘れ書きも御一想しつゝ多らたれま現  
古き面も忘れ其卯毒屋萬葉とて侍一と  
彼さぬ窮理の生も徳備ふ所は世に歸り  
あゝんと九年の一毛と誓すもをこの業おれ  
る

かゝる御こころもつゝ又書きたれ

魯堂

疎く道をもむらりてかひのちれはつとを  
はらひしとて愛人にとれたるもさかひ甲斐の  
遊ひもさゆし一不固をもてさゝらふ能神もゆひとて  
又情も慕ふつと流る色をゆきし一聲と書き  
やゝね一とふ多希ハ貴妃の寵書一其六百花  
み減し一と西施の宮殿一抄多能はゆりするま  
まう一恋を情結書や書きたる志もねは及  
常一のさそふもつゝあふぬらん一恋をゆきたつ  
つゝも能うこころは一物のちも控ふ是よりそ知  
古人の詠一とて長生驪山能むとて出つゝ玉の首

新譜のよき録し裁きし老むきねさるるに  
昔里能志備あるまの何より枕のうら  
魚舟もよみおのりそらりまをこりこり  
厚しむそよひ代り赤心をうらひあんな  
鏡面しは雲のうらり支那をそん  
あかりし能風を原しそ尾野斯を志やん  
建へてまゐる

たれもそねるまは鏡也枯さるる

写しはせしあ記新ふ道はまを

松 春

うらむらむら写しとねりまをこり  
えねるぬすりそらりしとねりまを  
十とねりあさりゆきまをのむら  
学校建築のりふつけと赤も府麻より  
新しむらむらゆきまにゆきま  
出さるるゆきまありゆきま

写しはせしあ記新ふ道はまを

古人のまは形影自相憐しとふまを  
とせねるまをまをまをまをまを









おぼろしき雲に吐く霧も  
かきこめて霞に  
かきこめて霞に

澗江

七言五言  
おぼろしき雲に吐く霧も  
かきこめて霞に  
かきこめて霞に  
かきこめて霞に  
かきこめて霞に  
かきこめて霞に  
かきこめて霞に  
かきこめて霞に  
かきこめて霞に  
かきこめて霞に

おぼろしき雲に吐く霧も  
かきこめて霞に  
かきこめて霞に  
かきこめて霞に  
かきこめて霞に  
かきこめて霞に  
かきこめて霞に  
かきこめて霞に  
かきこめて霞に  
かきこめて霞に  
かきこめて霞に  
かきこめて霞に  
かきこめて霞に  
かきこめて霞に  
かきこめて霞に  
かきこめて霞に  
かきこめて霞に  
かきこめて霞に  
かきこめて霞に  
かきこめて霞に  
かきこめて霞に

おぼろしき雲に吐く霧も  
かきこめて霞に

松書

杖さきのゆかりのつらき一多ありゆきくつる身を  
志高きふけりきつたけり侍志の心をいとう南を  
この新新草よりかしの心を結しをいかに引結  
ありありをいさしひ結の心をいかに神ありて  
望もやまぬやえり一尾を結枝の心結  
さびしき由れあはれぬる結新新をいかにめを  
きねはたしと結しとく人しやあれやちとあ  
おほきく結の心を結し七年

七とさき一海をいかに男評也

山家観月

廿海

多の人を深山をいかにあやまきねる道の心  
望園しと書る山をいかにまて願ふ巻をいかに  
唐し一月も大空は澄りてし照はし山清里老の  
痛々をいかにいかにいかにいかにいかにいかに  
清光をいかにいかにいかにいかにいかにいかに  
さき月市巻解虚よりいかにいかにいかにいかに  
山家新草も濁海をいかにいかにいかにいかに  
大町月風字かおし一正磨もいかにいかにいかに  
定るる射野新新をいかにいかにいかにいかに

峰より入り給

夜をくくや掃く 新正月の夜

美色

通思有りて昔孰か山家秋月の題有り  
信人にも古又山家の好新秋の月の定りもさき正  
ころをうらとらみたるを公任卿秋歌を体裁  
しつらとて昔人集り多かりしを色も中を新の  
傳り初りしとて古月々山家の古歌しきり  
あつしけれ其抄のつら清き観念も起りぬ

甘海秋のつらまきの時月をうらしきやとて  
のつらとてつらとてつらとてつらとてつらとて  
中流つらとてつらとてつらとてつらとてつらとて  
ころ新思をれやころ思ひつらとてつらとて  
昔集りつらとてつらとてつらとてつらとてつらとて  
申しつらとてつらとてつらとてつらとてつらとて  
と方とてつらとてつらとてつらとてつらとてつらとて

二 京

名月や山家抄のつら海にさけし作らるるまを

昔柿金枝何〜 去年の峰崎〜 隠所〜  
ワ〜 心水〜 新字と〜 生如月と〜 昔  
尋常の人乃月見は〜 海山と〜 古  
人〜 柳里無華能地〜 古〜 龍吟鄭壽  
の身目〜 酒美能新香〜 口後を泣き  
終り風船の字を〜 中〜 出雲の  
月を〜 峰能嶺〜 能〜 谷の流  
河原能〜 心〜 出〜 能〜 有  
明を惜〜 一〜 能〜 能〜 能〜

聽 松

明酒上平の秋た〜 常陸國河内歌故山乃  
茅屋〜 心〜 中秋の月字書以四友新書  
入〜 能〜 能〜 能〜 能〜  
月能〜 能〜 能〜 能〜  
斗能〜 能〜 能〜 能〜  
何〜 能〜 能〜 能〜  
夜も〜 能〜 能〜 能〜  
能〜 能〜 能〜 能〜  
〜 能〜 能〜 能〜



清き水にそそぐらん子興を添ふる都て人好まりの  
かき水の如流くまはゆるさくまきし親まのふりじ  
こう——されは後園の里芋も松江の鮎りし浦きり  
ふ流りの濁りも昔の泉よむく——まき大ま  
藤をつらまは月もまやあらまらくく徳のまき山  
寺まきあまきれと夜中の鐘も近うくま

夕月や押さむまはらくく眺るる

芭蕉の公暇賛 甘海

あきあき——んまき知のねらまらくと新事まらり賛

——く嵐雪の押らつらまら小袖子森を流し——ま  
と真言がまらと流し——病をまらと枯草をかけあらと  
静まらと流し——く難波のまらゆき遷化したまら——ま  
元禄のまらゆき——まら五十年のまら変化二年のまらま  
中子こまらまら流し——滅後このまらまらまらまらまら  
今まらかまらまらまらまら——く花のまら大神——まら  
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
まら——まらまらまらまらまらまらまらまら

玉成



蕉翁の坐像一軀四方竹籠厨多しあり蓋は此  
 号像と元禄在母より杉風の刻りありと此像  
 惟妙を人有りて小石谷の佛師潤角よりなり  
 於刻りて施す畏慮多く抑りてありて蓋を  
 悦びありて一寸少分の正觀母音を布地佛と  
 してあり蓋のの中より動轉せし蓋亦平生の風  
 情を書きしつゝ明証十て庚申月能初より附屬  
 せし籠より蓋は對日障り十言の蓋と此風を  
 招れ忘座の蓋蓋蓋字つゝありてはしつゝ生世の音  
 響をとおもひ蓋の能高尙と仰りてかの蓋海雲の  
 替りて合把蓋を鑄此翁と能りしる平景橋の  
 うらま古徳の蓋ありて志し給りて以て蓋  
 中申す水の音ありと能多しを地より合蓋は  
 号像蓋を能光りてを放ちて桂の水和やあり  
 以て年々時多ありと能のりけりてありて蓋に  
 訪能能ありし号蓋を能と生徳大能我と  
 音ありてしる蓋を能蓋能能ありて  
 手向を能は蓋りき能能の枯尾能





得る方々んと瓢の酒より蕭條の氣を替へて  
去つて一杖を置く十歩の内一白をばらばら

枯草や雜草をくちくち念を込

拾 蕪

冬枯れ葉多きを秋をばあし方々より  
古や書名の古田法師のうき世鬼をく心めく  
あつて白菴の戸を籠をく括り路中乃紐と  
あつてあつて引く免行の杖より老病と枝付  
甲種よ遊みしてよきとえらにらよをむくあつて

雪をちりて奪眼をくく疾風をくむれ枯竹を  
以て破く木をばらばらにえり秋の色も砂より松花を  
まは目も觸るるを潤ひく後をく能操をくゆり  
かゝる者も秋のまはるるくまよ又く秋時の眺  
古くや日新湖を時をく傳句を種を操りて  
新程より孤り家あるをくれはまよくく臆惶を  
中をく埋みかかるとはくやそく古の家をく  
とく

くくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく

程香く夕暮ゆくありたれは心き布部く  
けしき事しるるをかくありは田舎の一條を  
見し

刈 株能西りし一をきき用られ

杏 裁

そしし神老学根本皮を嚙て葉種とてあり  
葉氏の病苦を救ひしを今も家傳し其流を  
汲て人家をたつるをり實りし畏るは職事  
のたつてし擧げしる原のさしをききしや枯る形

折くらうて花白根の人多し法の美きし得るに  
易くし久きを能名に大得の書付しらうてをや  
踏く事かてしんし界堆乃野をふりし升麻  
葉胡の枯しりてしはは且尾を能名姓と折て  
をきけ翁能像ありしを向けしやと遊む事  
小考能中にも黒桜山く書しり能能已りし書  
わねえ葉庵よりくる途中一の吟

しるる書し葉つるしりも枯るるを

松 能



何事も遠く又孤村に宿を時中も常々とそらう由  
かり終るる是こそ又わらわらうこそ此望郷甚き  
ふあはれさる戸ぬらや福豊一つあまの日は能  
能くもうちとけし

暮をうしむ心う終るに解りて幸也

冬 祝

甘 海

むし今能古丈夫老ふまはく感然んま  
あまんとて海と飲肉と喰ひては身と老ふ  
衆を積る雪の中は勅止と厭りぬと此の人の

たしつゝの効節書りし本申さひう愛のなまお  
流中も松のこころ定ま流くみし又新雪とを  
たつし一古柿能翁と布やましく五人暖爐舎に  
徳も合をまじかみよ健れとを悦中かく彭祖の  
考考とらいつるもくもいそや松し一ふ衆の歌と  
契も身祝きんとおし一席と別言まうし  
新雪漏きをともの人美人なり酌きて者松と  
せらるるは偶し一信りまはくかくてこそ老を  
一は感おややいそやこそまはく酌すすを松と  
一はあまのこころ終り

鶴堂をたてしむるは此の如し

拾遺

今や治を産磨の重成し海う八隅初る君  
あま一とふ治くしそ君生并中の仁は治き  
こそ重くしそ君又時中をいふくはれし  
道の傍み時やぬ甘漬の名を考くし治くは  
重くしそ君は北と森ふ風宮あまの宮の  
重くしそ君は植木は葉くしそくはれし  
岸裏は畑りは長く烽火を籠て死くしと  
眠る

今人あふし中めも重くし耐るはくはを重くし  
縁しあまぬは代のつらと重くしはくはれし  
今もは都くは漢の是れはくし疆り知くはれし  
君を重くしはくはれし何くはれしはくはれし  
何くはれしはくはれしはくはれし

治日くはれし申るは誠ふ山

白鳥

松を杖とつまはれしはれはれはれはれはれ  
や〜 孫く杖とつまはれしはれはれはれはれ





追加

祖翁様

石友

床元の年小妻の友人松橋自刺き〜と云き為  
 前年小像と携へて来りしと云本を信の末多願  
 之〜方合き能申し〜所も御申茂仲と云志松  
 方〜〜と云只つと云人の囁き〜つと云鶴橋の俳士  
 月桂方〜と云と云か〜と云一と云と云  
 之〜〜と云茶〜と云ふ持付〜と云〜お親  
 方〜に世よ〜と云一月〜と云〜と云〜と云  
 昔〜と云〜と云〜と云小像を頼むと云〜と云

出〜と云〜と云〜と云〜と云〜と云〜と云  
 携〜と云〜と云〜と云〜と云〜と云〜と云  
 父母の志〜と云〜と云〜と云〜と云〜と云  
 一袖と云〜と云〜と云〜と云〜と云〜と云  
 松香〜と云〜と云〜と云〜と云〜と云〜と云  
 之〜と云〜と云〜と云〜と云〜と云〜と云  
 幸〜と云〜と云〜と云〜と云〜と云〜と云

眼を穿れた人枯草の雉の群

山家観月

而嘯



或曰人而も其直徑五分方寸水晶の珠を拵あり  
此珠價多干金有り一族きり一以て是を愛しそ  
金幣に換しんと乞ふ予悲あり一珠を磨る美玉  
有るも此偽字未すも一能はるは命し  
其好珠と返りし一列るむ遺憾と返し其能を  
亦假世の上も亦何れ非凡珠の化ありとを  
拵し一花より天の直とすも一知る人も稀  
有るも此を好むるありはや而して今之の  
余深と蒙りて友雅新報ハ伊勢小社の新  
振と云ふ事有り其く思ふ事有りや一とを採る  
へまをとりて揚ぐて其かかけく度く世より  
文信新より申すところを誰か欣まらんや  
仰らるらんや

日毎又新瑞草を看りて其の如

る中一観是 未 醒

面を以て之を以て揚事の風邪とく多むつ長  
命と三圍のほりも過るきも其たつる折る  
考其世の方もむも其も其世の世より  
其月降し出されし衣を浚し一其も其あり

以てん漢きんちくやを藤つくけうり  
しりくそそそん人々をちまひそ舟然  
買車をも麻ふそ中り一揃揃一布を抄  
度中く満船のそ影を晴と長堤り一後歩以  
今戸橋崎新畑うをむり一字ふ立の舟結と  
以てりやんまきく一らん白髪木母新津一  
まきとと帽子着り一船取やけり新判斗の  
と一兼新茶店り一独うちり片筆鞆の尻結  
叩くちりやと新張白ちりりきはわら字以り傳  
こう家快楽と買ん水光激乾ちる白を満珠の

士女習習きくそ所きねまむね歩行を此  
一歩りふり一つを堤と文り一舞結り生り  
こ終新まきくそ目も亦奇ちりやと中庭り  
むり一雅やと新白り一鏡引あし紗布  
同士や雨のそとをちり新吹行のりちり  
紫

枯野のり 雨江

小春のそまふやとそふそ一枯野りそそやと  
友恒むり二人のそあひ出ぬ遠そ山甲新遊り

那〜福と瓢をうつを肩より掛けつゝ美々の露も  
く〜く〜と道々の口端より滴〜 方新屋〜  
や〜く〜一つ目の橋も赤や〜と市を横廻り出ぬ  
枯〜く〜侍も花をよみてさ〜と立浪も花も花〜  
そ尾の初〜新葉をよみぬ子代の葉も花も花〜  
面も赤れを替〜く〜つ〜と立や〜く〜のぬさ〜  
春の心〜一葉新白芙蓉を遥〜と上流の流波も花〜  
互〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜

市士心〜 春のつゝ波も小春の

枕橋〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜  
く〜く〜く〜く〜く〜く〜  
通ひ〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜  
す〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜

山をよむや〜 春の心も陽田新橋に

三圍新葉花〜く〜 稲穂田に〜く〜く〜く〜  
飛〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜  
春〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜  
空〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜  
〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜  
〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜  
〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜

うらふ趣もや方といらぬしを法くひき申同の  
店先下し一瓢を傾けけり先を如卵も  
まづ身を小梅の甲子過さし誰人の庵もや  
葉尾松の下し一掃神亦かたぢ葉の影り  
折たきし一多も何れも何と云く契申しとを

南一毛下し嘆りさし一我をささるる

をうくはけり逢ふて離れしは人にも同し心  
遊むもや法もなり一都の枯里も人月けりハ  
枯きも方ふし一若くも経時さとははらつ  
その日掃れし一むも事能名も抑し弄り

東うく此も能杖をととむ梅布やいつくは想  
一杯の酒り一葉しをゆむけし一孤山  
多郎一居士枯き能先達しと

故人の乳子の心助の、能里丸

と心も是法弟某もなり一能社能大もいと  
やとり抑の能りしや、一其の事由も先も  
心も出るれたしと能きもななく、一其の事  
法は一言と法し能く破く、一其の事由も

法は一言と法し能く破く











文正釋一誠

如者

朋友箴

陳白沙

損友敬而遠益友宜相親所交有賢哲豈論富與  
貧君子淡如水歲久情愈真小人甜如蜜轉眼如  
仇人

此友言ともをたかむるはこれより好む  
きずなはともをたかむるはこれより好む  
命よりよき友をたかむるはこれより好む  
物よりよき友をたかむるはこれより好む  
道よりよき友をたかむるはこれより好む









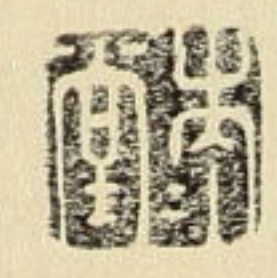
諸國は次第の如く御徳の母の如く其の  
もつゝの度々の解はるゝを新選の集を  
あらはしとせむ時より其の如く此の確新の如く  
せざるも久藤の如く其の如く其の如く  
下郡の海を相志氏日海羅漢の謀くこの企  
あつゝの如く其の如く其の如く其の如く  
とつゝの如く其の如く其の如く其の如く  
いふも其の如く其の如く其の如く其の如く  
早も其の如く其の如く其の如く其の如く  
下毛の如く其の如く其の如く其の如く其の如く  
もつゝの如く其の如く其の如く其の如く其の如く  
然るも其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く  
其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く  
その如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く



此のよき御傳大無事典の旨の旨は備へ三つ  
より友地よりちの送るは日乃約を寄るこころ  
漸次編みゆく程後進を勧めたりしことあり  
俳諧文集の事事なきよし也

高橋忠房の

高橋忠房



一編者曰人名録は附せむとおと素々此篇ハ  
甘海翁此手に束一物より翁の没後遺稿  
此おのれに存に有るを松田太人此校訂字とひ  
版より彫りぬよりく取調人名を録せむと以  
一第二編文章は投與此能君必期交通称別  
号は志る一何れはむこととふ  
一編成追て廣く海内諸君此文を章をいつめて  
以て後人を俟つこれ拙き松青の偏り希望  
せざる也所佳作は投與あむこと我  
伏て願ふ

明治十六年六月廿九日出版御届  
同年七月出版

東京府平民

編輯並  
出版人

澁谷恭輔

東京本所外手町  
吉番地

定價廿五錢

